

## 私と病院図書室

愛知県がんセンター図書室 安田多香子

私は図書館員となって 40 年、その約半分の 20 年を病院図書室で働き、2011 年 3 月に定年退職を迎えました。その年月を振り返りながら、今、病院図書室で働くみなさんに伝えたいことをお話しします。

### I. 「結婚しても、子どもを持っても働き続けたい」と図書館員を希望

40 年前は高度成長時代、「人手不足」の時代でしたが、図書館は今と同じで「就職難」でした。ようやく就職できた愛知県の図書館ですが、「結婚して」転勤を命ぜられたのは交通手段のない、通勤困難な教育関係の図書館職場でした。流産を経て、出産はしたもの、毎日は時間との戦いでした。毎年、毎年「転勤希望」を出したのですが、一向に叶わず、とうとう 10 年間経った時、出た「転勤命令」はより遠い勤務地でした。上司に内示撤回をお願いするものの、片道 1 時間半の看護専門学校へ転勤となりました。幸い、わずか 1 年でがんセンター図書室へ転勤となったのは、1 年前、勇気をもって「内示撤回」を訴えたことが聞き届けられたためだと思います。

### II. 「医学図書館」界に入り、感じたこと

1989 年にがんセンター図書室に転勤になり、本当に驚いたことが 3 つありました。1 つは、利用者のニーズの高さです。当時から文献検索は「すぐに」「的確に」が求められていましたし、文献入手は「迅速に」「あらゆる手段を使って」入手すべきもの、外国雑誌は、欠号なく揃え、少しでも早く提供するためにあらゆる努力をしていました。

2 つめは、公立、市立、国立という設立母体を超えて「医学」ということで繋がっているネットワークのすばらしさでした。それまで「ネットワーク」の重要性は言われていたものの、こんなにも結束しているネットワークを知りませんでした。

3 つめは、最先端の医学に貢献できることの喜びでした。図書館も最先端の技術を取り入れ、ニーズに応えようとみんなが努力していました。

### III. 当時の「病院図書室」はどうだったか

1. 多くの病院図書室では、外国文献の検索はまだ冊子体の Index Medicus を購入し、手作業で検索していました。そうでないところは、オンライン検索が普及し始めたばかりで、電話を繋ぎ、「音響カプラー」を通じて、コンピュータで、日本の JICST が NLM から購入した Medline を検索していました。(MEDLARS といいます) これが高額であるため、代行検索が当たり前で、図書館員はいかにうまく、的確に検索ができるかという「腕」が問われたものでした。その後、CD-ROM になった時には、「エンドユーザーがゆっくり検索できる」と好評でした。さらにその後、1997 年 6 月の Pubmed による Medline の無料解放に繋がっていきました。

日本語の文献も同様で、医学中央雑誌は冊子体で刊行されていました。その後、CD

—ROM になり、現在の「医中誌 Web」と繋がっていきます。

2. 文献入手については、それまで、病院の医師の多くは製薬会社のサービスとして文献を受け取っていた時代があったのですが、1993 年に製薬会社が「文献提供自粛」することとなり、病院図書室への文献の依頼が一気に高まりました。日本医学図書館協会参加の 91 大学の文献受付件数は 1992 から 1993 年には 27%アップし、その原因は病院図書室から大学への依頼が増えたことによりました<sup>\*1</sup>。1995 年にはその要望をうけ、日本医学図書館協会は加入基準を変更し、病院図書室の加入も可能になったのです。

#### IV. 病院図書室のネットワーク

1. 文献入手の高まりから、病院図書室のネットワークの必要性も高まってきました。近畿病院図書室協議会はすでに 1974 年に設立されていましたが、この静岡県医療機関図書室連絡会も 1982 年に設立されました。ネットワークのある地区では大学への依存ばかりではなく、互いの病院図書室同士の文献のやりとりができるようになりつつありました。
2. 東海地区の静岡を除いた地域ではまだ十分なネットワークができていませんでした。東海地区医学図書館協議会は静岡県医療機関図書室連絡会と合同で、近畿病院図書室の書誌をもらい、愛知、岐阜、三重、静岡の病院図書室をまとめる「東海目録」を作成することに着手しました。私も最初のメンバーとして参加しました。1997 年から実に 5 年の年月を要して、ようやく 2002 年に冊子体の「東海目録」が完成しました。2005 年には Web 版となり、目録会員制度も発足、現在に至っています。来年 2013 年の 4 月からは、近畿病院図書室協議会の *kinki-web* と合同となり、新目録になって、他の病院目録とも相互検索が可能になります。

#### V. コンピュータ・インターネット・電子ジャーナルのめざましい進歩

1. 振り返ってみるとコンピュータの発展を目の当たりにできたことはわくわくする経験でした。

私が最初に目にしたコンピュータはメインフレーム（汎用機）でした。冷暖房完備のコンピュータ室には大きなコンピュータが立ち並び、2 進法の言語をパンチしたカードを束にして読み込ませ、大きなコンピュータ用紙に結果がガチャガチャと打ち出される、というものでした。

それが、1978 年マイコンというものができ、8 ビットから 16 ビットになり、「8086」ができ、ついに「MS-DOS」が使われ、何はなくとも「NEC98」全盛の時代が到来しました。当時、1980 年代からすでに病院ではアップル社の Mac が普及、ユーザーにフレンドリーなパソコンと好評でした。その後はいわずと知れた Windows 全盛時代になり、iMac が巻き返す形で、2012 年の現代では、iPad や iPhone が入り乱れて賑やかな様子です。

2. インターネットの普及もエキサイティングでした。1995 年がインターネット元年といわれますが、医学図書館界ではほぼ同時に電子ジャーナルの時代となりました。「病院図書室に電子ジャーナルは根付くか」ということがテーマになったこともありましたが、今では大病院を中心に大いに普及が進んでいます。

3. 電子ジャーナルは、最初はプリント版のおまけとして付いていました。最初は、雑誌の「Subscribe No.」を入力し、一つ一つ登録していくことから始めました。しかし、電子ジャーナルはそれだけでは使えません。利用できるジャーナルを院内に知らせるためには院内のホームページが必要になり、手作りのホームページと電子ジャーナルリストを作りました。又、当時のがんセンターの LAN は未整備で、研究所と病院は別々でした。その LAN の結合を訴え、グローバル IP アドレスの必要性を訴えたものでした。LAN の統合が完成し、PubMed、医中誌 Web からの Link-out を付けることにより、いっそう便利に電子ジャーナルが利用できるようになり、電子ジャーナルは急速に院内へ浸透していきました。利用者からの反響の手応えを感じたものでした。

## VI. 図書室全面委託提案

1. 2000 年からの国の方針を受け、地方も行政改革を強いられました。愛知県は病院事業庁を設立。県の組織と切り離しました。目的は「良質な医療の提供」と「経営の健全化」でしたが、その 2 つの両立はなかなか難しいと私は感じています。収入増益のため、徹底した人員削減、業務見直しの結果、人員削減の一つとして、2005 年 11 月「がんセンター図書室の職員 2 名を削減し、全面委託にせよ」という提案がされました。それは、病院事業庁長のからの一方的な提案であるものの、すでに残されたのは組合の交渉のみでした。
2. 「図書室全面委託提案」のニュースは、すぐのがんセンターの内部に広がりしました。まず最初に医局長を中心に「がんセンター図書室業務委託に対する要望書」をまとめ、病院全体の署名に取り組み、449 名の署名が集まりました。次には、東海地区医学図書館協議会が「愛知県がんセンター図書室業務委託に関して（要望）」を事務局と幹事の 2 名で、病院事業庁に手渡しました。研究所も緊急の会議を開き、決議し、研究所研究員、技師、レジデント、研修生一同 124 名の署名を集めてくれました。その他、愛知県の「司書連絡会」66 名、病院事業庁の他の病院から 1,452 名の署名がわずか 2・3 週間のうちに取りまとめられました。その署名を持って、「全面委託撤回、司書 2 名の復活」交渉へと臨みました。
3. 1 月 28 日から 12 月末まで、知恵を絞って資料をまとめ、復活交渉を行いました。0 回答が続く、事業庁は「専門性の高い委託にする」との回答でした。足かけ 2 か月に渡る交渉の末、もうだめかと思った時、「1 名復活」の回答が出ました。つまり、「今すぐの全面委託は困難」という結論になったのです。裏には委託業者の辞退もありました。図書室管理部門の委託は他の部署への負担が大きいということが認められたとも思いますが、何よりも、病院、研究所のひとりひとりの利用者の大きな支援があったことが、「一度決まったこと」を覆す、という力になったのだと思います。
4. この経験で、「専門性とは何か」ということを深く考えさせられました。今でもはっきりとは答えられませんが、「専門性」とは、今までカウンターで学んだ多くのことであり、どんなことが必要とされているかを体得し、積み重ねてきたことではないかと思います。それは、県立病院全体に対しても、東海地区の病院に対しても貢献できるものですし、ひいては患者さん、住民に対しても貢献できるのではないのでしょうか。これら「積極的な貢献」は「経営改善」「経費節減」の前にはいかにも無力でしたが、

私は訴えずにはいられませんでした。

5. 1名削減の代わりに募集した「嘱託職員1名」に対し、なんと73人の応募がありました。「図書館で働きたい」が正規職員の採用がないということの現れです。雇用の安定、安心して働ける図書館でこそ、専門性を高めることができるのではないのでしょうか。

## VII. 今までの経験を通じて、病院図書室で働くみなさんへ伝えたいこと

それは、病院図書室の仕事はニーズが高く、求められている仕事であるということ、その求められている専門性をみがき、ニーズに応じて欲しいということ。病院図書室は、一人だけの職場が多いけれど、力強いネットワークがあるということ。どんなかたちであれ、今ある「人」のポストを決してなくさないで欲しい。そして、病院には「図書室」が必要であるということ、「図書室」には「人」が必要であるということ、をみなさんの「仕事」で伝えて欲しいのです。

## 参考文献

- 1 演者 篠原寿美江 小林成江 コーディネーター 奥出麻里： シンポジウム 病院図書室の相互貸借サービスの急増にどう対処するか、日本病院会雑誌 1995：42：1451.1465



(この原稿は、平成24年11月9日に行われた静岡県医療機関図書室連絡会研修会での内容を基に、ご執筆いただきました。)